

令和8年公認会計士試験 第Ⅱ回短答式 試験講評

企業法	<p>企業法の難易度は、前回と同程度で、全体としては「標準的な問題」でした。出題形式・問題数は従来通りであり、出題内容も条文知識を問う問題が中心でした。なお、判例に関する肢は前回の2肢から6肢へとやや増加しました。</p> <p>一部に細かい知識を問う選択肢もありましたが、大原の教材を正確に理解・記憶していれば、他の選択肢との比較や消去法により正答を導ける問題が多かったと考えられます。今回も基礎的かつ重要な論点を正確に理解・記憶していることの重要性が改めて確認される試験内容でした。</p> <p>ボーダーラインとしては、70点から75点程度の得点を目指したい内容でした。</p>
管理会計論	<p>管理会計論の難易度は比較的解きやすい問題でした。出題形式・問題数は前回と同様、公表内容通りであり、計算10問(60点)、理論8問(40点)の比率でした。難易度については、計算問題は前回に引き続き解きやすいものが多く、理論問題については一部読み取りづらい問題があったものの、それ以外の肢から判断することが可能な問題も多く出題されました。そのため、時間内に解答することは十分に可能であったと考えられます。</p> <p>理論問題については、原価計算分野において、前回と異なり「原価計算基準」以外からの出題が多く見られました。管理会計分野に関しては、前回と比較して読み取りづらい文章はあったものの、基本的な知識を問う問題が増加した傾向が見られました。</p> <p>計算問題については、原価計算分野は前回同様、全体として基本的な問題が多く、得点しやすい内容でした。管理会計分野は、前回と比較して問題文の文章量が増えており、問題把握から解答までのプロセスが見えづらい問題も見られました。</p> <p>ボーダーラインとしては、計算問題で7～8問、理論問題で5～6問を確実に正答し、合計75点程度の得点を目指したい内容でした。</p>
監査論	<p>監査論の出題形式・問題数・分量は前回と同様で公表内容通りでした。問題文を読んで思考する問題が多く、受験生にとって得点しづらい問題が多かったものと考えられます。</p> <p>問題の内訳としては、テキストの知識のみで正解できるAランクが12問、事例文を読み取り、与えられた状況に応じて判断する必要があるBランクが5問、解答困難なCランクが3問でした。</p> <p>出題分野については、近年継続して出題されていた保証業務が出題されませんでした。一方で、それ以外の頻出分野である公認会計士法等の各種法令、品質管理、不正は出題されており、出題分野全体としては大きな変化はありませんでした。</p> <p>ボーダーラインとしては、Aランクを確実に得点したうえで、Bランクのうち事例文の読み取りや状況判断で対応可能な問題を積み重ね、70点以上の得点を目指したい内容でした。</p>
財務会計論	<p>財務会計論の出題形式・問題数は前回と同様でした。計算問題は21問、理論問題は14問、全体として35問の出題でした。計算問題の内訳は、個別問題が9問、総合問題が6問×2セットという構成です。</p> <p>【計算】</p> <p>個別問題は、集計量の多い問題や難度の高い問題が一部含まれていたものの、約半数は平易でした。そのため、演習を中心に問題練習を行い、テキストで基礎論点を網羅していた受験生であれば、6問以上の正答が期待される内容でした。</p> <p>総合問題の1問目は、個別財務諸表に関する問題で、3～4問程度の正答を狙える問題でした。一方、総合問題の2問目は、連結財務諸表に関する問題で、複雑な推定計算が含まれていたことに加え、問われている論点自体も平易ではありませんでした。そのため、2問程度の正答で十分と考えられる内容でした。</p> <p>以上より、計算分野116点満点においては、66点程度がボーダーラインになると考えられます。</p> <p>【理論】</p> <p>最近の本試験に比べると難しい肢や細かいひっかけが多く、手応えがなかった受験生も多いと思われます。もともと、すべての肢を正確に判断する必要はなく、テキスト掲載論点を中心とした易しい問題を確実に正答することが求められました。</p> <p>以上より、理論分野84点満点においては、54点程度がボーダーラインになると考えられます。</p> <p>【総評】</p> <p>財務会計論のボーダーラインとしては、200点満点中120点、60%程度の得点が目標点となります。</p>